

こんな砂漠にも楽しみはある。倒した木の葉を食べるにウサギが集まるから帰る時に輪を仕掛けて帰る。沢山いるものだから仕掛けた数だけ翌日かかっている。

これを煮て食べるが、塩はあるが砂糖がないゆえ全くうまくない。だから余り取らないことにした。他に地ネズミが沢山いた。これはうまいが捕獲するのに腐心した。天気の良い時に餌をあさりにネズミどもは小さい巢穴を出る。出ているすきに穴の入口に輪を仕掛ける。頃合いを見て大声をあげるとネズミども一斉に巢穴めがけて飛び込む。後へ引く事を知らないネズミどもを一網打尽に捕獲する。これも田舎育ちの生きるすべと思った。

帰国して大勢の方が雪の深い所で伐採やら鉄道建設に働かされ、また命を落とされて異国の土になった方の事を思えば、私はまだ恵まれていたとつくづく思う。

後は皆さんがたどったことと同じ思想教育をナホトカの海を前に後戻りしてなるものと必死に空耳を立てられたことと思います。友よ安らかに眠れ。

#### 【執筆者の紹介】

筆者は大正十三（一九二四）年十月三日、徳島県海部郡実喰町生まれ。

全抑協発足当時よりの会員であったが、大阪市内より現住所に転居され、その後連絡を断っていたが、最近偶然にも知人の紹介によりこの原稿を入手する機会を得た。その内容は抑留者として貴重な体験記であることに間違いない。

（大阪府 杉山 森一郎）

#### シベリア抑留記

兵庫県 芦田 史朗

#### エトロフ島守備隊

旅団命令により、エトロフ島の中央部ヒトカップ湾に面した重要な一地区を担当し守備する。

初め、水際において、「ラッコ島」の天険の地形を利用した水際撃滅作戦をとって、日夜陣地構築に全力

を尽くした。この間、南方海域の戦況は急を告げ、昭和十九（一九四四）年七月サイパン島、八月グアム島、九月モロタイ島等々が熾烈なる物量攻撃に抗し得ず、遂に玉碎するに至る。

米軍は、海空よりの砲爆撃により水際陣地を壊滅の後、上陸し橋頭堡を築き、我が軍を追い詰める戦法を常套している。敵を水際に撃滅する策は利あらず、縦深配備により長期持久戦法に転換した。大隊は旅団の指示に基づき、奥地約四キロにわたる縦深の配備変更を決定し、二十年一月より急遽陣地移動作戦に着手した。決戦を避け、一面の這松と天険の地形、濃霧等、奇襲に有利なる条件を最大限に活用して長期持久策を講じた。這松を切り開き、道路を構築しながら、人力でもって港より弾薬資材、糧秣の分散貯蔵等、日夜戦闘準備に全力を尽くした。

八月十五日、突如、終戦の大命を受けた。虚脱状態となり、環境整理に努める。

#### ソ連軍進駐

二十年八月二十八日、ソ連軍の先遣隊（海軍少佐指

揮約一個中隊）が留別湾に上陸した。

二十年九月十日頃、ソ連軍本隊の進駐により武装解除を受ける。天寧飛行場に各隊ごとに武器を集結した。将校は一カ所に集結させられる。

二十年九月十七日、師団命令が伝達された。「わが師団は、ソ連軍の好意により、ただいまより北海道に向かつて前進せんとす」武装解除後とは言え、命令は重かった。「軍装品の携行は許さず」毛布一枚と外套一着、飯盒一個を持って、その場に野宿することになった。

二十年九月十九日午後、天寧港へ向かう。艇はしけに乗ってソ連船へ乗船した。船はドラも鳴らさず静か、船の振動が伝わってきた。「北斗の星座に向かつている」「おかしいぞ、北へ行くぞ」

九月二十一日、「将校のみ上甲板に集合せよ」との命令。樺太の大泊であるらしい。「東京で返還するから預かる」日本刀、磁石、眼鏡、時計等を提出させられた。

その後、二日ぶりに食事が出た。船は、夜だけ動い

ている。大泊を出港したようだが、「船は北上している」「太陽が右に見えるぞ」

北海道へは向かっていないようである。誰も不安とあせりで、話し声も聞こえず、まるでお通夜のようにもある。船は北へ、北へ、不気味に北上を続ける。

#### シベリアへ上陸

昭和二十年九月二十三日、ものすごい音を立てて錨をおろした。ここはまぎれもなくソ連沿海州のシベリアである。「下船準備せよ」「下船」

ただただ、一点を見つめるだけである。「北海道へ」嘘をついてシベリアへ連れて来られた。牛が引かれて行くように、ゆっくり、ゆっくりと歩いていく。かくしてシベリアへ上陸させられた。ソフガワニというところらしい。貨物列車に乗車した。

千島の夜も短かったが、ここシベリアでも四時に夜が明けた。夜が明けてみると、水たまりはすっかり氷が張っている。ひどく寒い。のどがかわく。水がほしい。貨車は時々動いては長い間停車した。駅もなく松林の中で停車した。「全員下車」

#### 三一五収容所

秋の夕日が建物の赤い壁を照らしている。四方に火の見櫓が立ち、周囲に二重の鉄条網が張り巡らされた収容所に着いた。囚人、流刑者等の収容所跡に違いない。極めて古い建物である。

全員整列して、大隊長の話聞いた。

「エトロフ島を出発して、北海道へ上陸するはずであったのに、予期しないところへ来てしまった。誠に残念だが、再び帰国できる日まで、健康に留意して頑張ろう。この収容所に千二百人ほど入らなければならぬ。場所が狭いが辛抱して元気を出すように。食事は黒パン三百グラムと、スープで千八百カロリーは支給される」

この収容所は三一五と呼ばれ、門前で五列縦隊に並んで、ソ兵の人員点呼を受けて入所した。

このとき以来三年間、鉄条網の中で、櫓の上からマンドリン銃を持ったソ兵に監視される生活が始まった。作業にも銃を持ったソ連兵に同行され、監視付きの強制抑留生活を送ることになる。シベリアへ来て

も、部隊編成がそのまま生かされるらしい。

これからは、作業の指揮官として、ソ連側との交渉や連絡の役目を担うことになる。また、自分の健康のことだけでなく、第三小隊みんなの健康のことも考えなければならぬ。ソ連の作業主任から作業内容の指示を受けて作業することになる。

極めて困難なことである。第一、言葉が通じない。身振り、手振りで始めることになった。そして厳しい「ノルマ」のあることも知ることになる。

### 「南京虫」と「蚤」

この建物は「マサ茸き」の平屋である。一棟を二段に改造されたが狭苦しい。一人平均四十センチの床しかなく、頭足交互に就寝する。電灯も水道もなく、灯油も十分でなく暗い。狭くて窮屈である。やっとの思いで横向きになった。それも束の間であった。飢えて待ち受けていた南京虫の総攻撃である。天井から「ポトン、ポトン」と顔や腕に落ちてくる。下からは蚤が「のそり、のそり」と這いのぼってくる。首筋から袖口、足首から全身へ這い回る。かゆい、かゆい、ごし

ごし掻くより方法がない。それでも昼間の疲れからか、いつの間にかとうとうと眠れたものである。風呂もなく、洗面所もない原始生活が始まるのだ。

### 伐採作業

厳しい伐採作業を第一に話さなければならない。ここを通る機関車は薪を焚いて走っている。いつ、どこでも積み込めるように沿線に薪を積んで置かなくてはならないのである。だから、薪が多量に必要なのである。

松や白樺等を伐採して薪をつくる作業である。作業量（ノルマ）はソ連人と同じである。この国にはすべての作業にノルマがある。ノルマは二立米である。二メートルの長さに切り、一メートルの幅、そして一メートルの高さに積み上げなければならない。

小隊は三十人だから六十立米である。ピラー（鋸）、タポール（斧）を渡された。目が立っていない鋸は二人用である。とにかく、みんな仕事をしているのだが、ノルマの半分もできない。毎日のようにブローラップ（作業主任）に呼び出されて注意された。そのうち

に、成績を上げるために枯れた木や腐った木を積むものだから、「ヒートリー（うそつき）」と言って余計に怒られる始末である。叱られても、責められても、みんなの体力を見ているときつくは言えず、困ってしまった。

十月一日に初雪があつてからは、だんだん寒くなつてきた。

伐採作業は危険な上に体力を消耗する作業である。この伐採作業は大隊の癌となつたように思える。協議して各中隊一週間ごとの輪番制にしたほどだったが、成績が不良のままである。

毎晩呼び出されて「ヨッポイ マーチ（汝の母と姦せよ）（ばかやろう）」この言葉を何度聞いただろう。

#### 線路補修作業

戦争中、コムソモリスクからソフガワニまで二百キロのガム鉄道の建設工事が急がれたらしい。シベリア送りの囚人達の手で工事されたらしいが、このガム鉄道は線路を置いただけの未完成である。そのため、強制留された日本人が、ガム鉄道の線路補修工事に使

われたのである。

#### バラス下ろし作業

バラスを積んだ貨車から、線路横へ下ろす作業である。一口で言えばそれだけのことであるが、酷寒期の深夜であろうとバラス列車が到着したら出勤しなければならぬ。

「ダワイ（早く）」「ダワイ」「ダワイ」

短時間で下ろさなければならぬ。バラスはカチカチで、動いてくれない。小さなスコップでつくとスコップが曲がる。くわでこせて起こさなければならぬ。午前二、三時の厳しさは恐ろしい。油断していると凍傷になってしまう。次の汽車が来るからと、「早く下ろせ」銃を向けられる。

#### リオット作業

氷割り作業、本当に恐ろしい仕事であつた。割つても割つても地下水が噴き出てくる。際限のない仕事である。「賽の河原」である。地下水が線路横に湧き出る所がある。夏は流れて問題にならないが、十月下旬頃から凍って盛り上がってくる。そのままにしておく

と列車が危険であり、鉄道が不通になる。徹夜で氷の番をしなければならぬ。一晩中、翌朝、交替が来るまで続けなければならぬ。

#### 黒パンとスープ

空腹の日々である。食事は、朝夕の二食は薄い粥（スープ）で、昼は黒パン三百グラムの携行食である。

十一月頃になると、千島から積んで来た糧秣がなくなったのか、粥のスープでなく、大豆粉や高粱のスープが多くなってきた。このために体調を崩す者が多くなってきた。

黒パン三百グラムといってもほんの一切れである。腹が減るので朝食べようものなら、晩まで何も食べるものがない。わかっている、もう少しと食べてしまふことになるのだ。そして作業しなければならぬ。だから大変だ。腹が減って空腹の日々が続く。空腹に耐えられず食物の盗難が多くなる。いや、数少ない所持品を盗んで黒パンとの交換がますます盛んになり、自分の持ち物と他人の物と区別がつかなくなり、他人の物を盗むようになるのだ。

「人を見れば泥棒と思え」「衣食足って礼節を知る」ことわざが思い出される地獄が続く。人間の極限の生活である。

#### 煙草

一本の煙草を二人で分けるのでなく、十人、二十人と一口ずつ回しのみするのだ。ソ連では煙草の支給は一度もなかった。ロシア人は煙草を裸のままポケットに入れていく。吸いたいときに取り出して、新聞紙で巻いてでき上がりである。「ダーイチェクリーチ（煙草を下さい）」人のよさそうな彼等は笑顔でその吸いかけの煙草をくれる。ポケットのちりも一緒の手巻き煙草のことを「マホルカ」と言っている。

「ダーイチェクリーチ」時々通り過ぎて行く彼等に頼むのである。

#### 犠牲者続出

シベリアに来て六カ月になる。歯ぐきから出血したり、脇腹あたりに内出血を起し、ビタミンC欠乏症に悩まされ始めた。松の葉を噛んだり松葉の汁を飲んだりするが、だるく感じるようになった。シベリアの

冬將軍は格別である。手や足の先が針で刺されるように痛い。このまま凍ってしまうのではないかとの不安に襲われるほどである。給養や環境の悪条件のもと、酷寒の作業は依然として続いた。

二月、三月となると、もともと身体の弱い人は体力の限界に達し、栄養失調が基で発病する人が多くなつた。十分な手当てができず、病院送りとなつてもこれまた十分な手当てが施されず、シベリアの地に恨みをのんで倒れたのもこの二十一年の春が最も多く、実に悲惨な春であつた。

#### 身体検査

所長命令で大掃除が始まつた。この国でも上官が視察に来るときは決まって大掃除である。何かあるなど思つていたら、女医の身体検査があつた。

二十一年の四月であつた。真っ裸になつてドクターの前に立つのだ。女医はいきなり尻をつまんだ。各個人の体位の等級検査が行われた。

#### 一、二級

健康者 作業適当

#### 三級

やや病弱者 軽作業適当

#### 四級(オッペ)

虚弱者 要静養

ソ連もようやくやく、我々の体力の衰えに配慮したのだ。オッペは荷物をまとめてオッペカローナーに移動した。

#### 民主運動

収容所へ日本新聞の配布を受けるようになり、民主運動も本格的となる。すなわち日本新聞を通じて反軍思想及び反帝国主義闘争、天皇制打倒を叫び、また一方においてはソ連の礼讃と共産主義を宣伝し始めた。民主運動の指導教育を受けた活動分子が収容所に配置された。階級章を取り除き、敬称及び敬礼の廃止、将校も作業を行う等軍隊の秩序は崩壊した。

#### 欧露へ シベリア鉄道横断

昭和二十一年七月、突然の移動命令で、将校団二百人が有蓋貨物に乗車させられた。

#### 「プローホ オフィセル」(悪い将校)

#### 「プローホ コマンジール」(悪い指揮官)

活動分子(アクチーブ)の管理になつて、千島からの沿海州の将校が集合させられたのである。行き先が

わからない汽車の旅の始まりである。

「帰国ではないだろう、有蓋貨車に五十人ほど押し込まれたから」

「しかし、何か解放感というか、自由になれたと感じた。もう隊のみんなのことを考えなくていい、自分のからだのことだけを考えればよいのだから」

「水浴せよ」

広い広い川、きれいな水である。川辺で野糞も格別である。泳いだり水浴したり楽しい時を過ごした。このとき初めて貨車の多いのに気がついた。十二、十三、十四、十五、……。

バイカル湖。西へ西へ、大陸の中に忽然と現れた大平原の岸辺を走る。大平原のかなたに小高い丘の大森林地帯が見える。列車はウラル山脈に入ったと知らされた。大森林の中を何日か走った。下り始めた。ウラル山脈を越えてヨーロッパに入ったらしい。四十日ぶりの貨物旅行はマルシャンスク到着で終了した。

三週間の隔離休養生活を送ることになった。本当にありがたいことである。毎晩のように演芸会が続い

た。芸達者ぞろいである。元満州国の役人、刑事さん、将校さんたちの芸は素人と思えなかった。

欧露での作業もシベリアと同じであった。そのほか、日本新聞が配られたが、みんな無関心であった。総じて作業も慣れたせいも、よく働いた。

アクチーブ

「ソ連のために働こう、よく動き、ノルマを上げて生産性を高めよう」と叫ぶ。しかし、我々は冷静に聞き入っているだけだ。その我々を反動だと言う。そして静かに聞き流すしか方法がない。

かくして、十月に入って歓送大会が始まった。どうやら帰国できるらしい。毎日毎日、朝から晩まで、学習会や歌唱指導会が十日間ほど続いた。会場正面にはスターリン、レーニンの肖像画が飾られている。「人民政府樹立」「天皇制打倒」等のプラカードを持った青年行動隊が並び、赤旗を振っている。盛大な大会が開催された。次々に繰り広げられる光景は、ただただ空しく思われた。諸君を一日も早く帰国させたかったのに、アメリカが邪魔をしたからだとか、天皇制があ



るからだとかの話であった。そしてソ連同盟万歳、ソ連に感謝しようというのだった。

#### 再びシベリア鉄道の旅

雪のマルシャンスク駅を出発した。もう二度目で、勝手知った棚のある貨車に落ち着いた。帰国のためか、歩哨は銃を持っていない。雪の大平原を東へ東へと進んだ。本当に寒い、夜中の寒さは身にしみる。火の気の一つあるわけがない。震えがとまらない。自分の吐く息で周りに氷ができる。だれの眉毛も真っ白である。一車両三十五人、十五車両編成帰還列車は東へ東へ進む。シベリア鉄道、送られたときは春であったが、今度は寒季輸送であった。

#### ナホトカ収容所（思想教育）

十一月三十日の早朝、ナホトカに到着した。ここナホトカは日本の舞鶴港と交換船で通じる港である。しかし、もう最終が港の外へ消えていくのを見た。最終船に間に合わなかった。

ナホトカ第二収容所に入った。収容所に入ってくつろいでいると、いきなり日本新聞や共産党史が配布さ

れた。マルシャンスクで「反動だ」と思想教育を受けたが、革命歌を歌う気にもなれなかった。

我々の大部分は階級章をつけたままである。このことがアジプロラの標的らしい。アジプロの日本人たちが夜昼となく、暇を見てはやってきて演説を続けた。一人が演説していると、彼等の仲間が通路で監視している。ナホトカでは思想教育が主なようで、作業といっても雑役である。

三度目の正月を迎えた。ここは電燈がついている。夜は演芸大会が開催された。楽しい演芸会の途中、「菊は栄える、葵は枯れる」を歌った時、突然アクチーブが立って「菊は栄えるとはけしかんらん。天皇制は栄えない」と演説した。「日本は反動政府で船もよこさないではないか、この反動政府を倒そうではないか」

次々にアジプロが始まった。演芸大会は中断された。アクチーブに同調者が出てきた。その人たちは作業の指揮官に多かった。

門の出入りには革命歌を歌うようになった。だんだ

んと収容所の空気が変わってきた。建物の内外にアジビラが張つてある。思想教育の徹底、「同志」「反動」「日和見」「インターナショナル」「敵前上陸」「天皇制打倒」、講義中うっかり横見したり居眠りでもしようものなら大変なことである。見張りにつるし上げられる。この同調者にいらまれたら大変である。同調者は共産党史研究グループをつくった。そして特別講義を受けていたようである。勝手に我々を色分けしているようだった。肌寒ささえ覚えた。

三月下旬になると、引揚げ再開に備えてか、仕上げ教育とますます激しくなった。四月に入って、突然、十人ほどが呼び出しを食った。「すぐ移動準備せよ」恐れていたことが現実となり、奥地へ送り返されることになった。暮を覚えてくれた先輩もその中に入っていた。「ご苦労さん」言葉をかけて送った。護送命令を受けた人々は、胸を張って誠に堂々としていた。反動と刻印を押された彼等が笑って護送されたことに安心した。

明優丸に乗船 帰国復員

昭和二十三年五月三日、船のタラップの前に立った。ソ連の係官が名前を呼び上げてくれた。「ガッ」「ガッ」タラップを一気にかけて登った。船上の人になった。「ご苦労さん」「ご苦労さまでした」みんな日本人である。きれいな花が一面に飾つてある。無事に乗船できた。もうここまでは呼び出しに來ないだろう。何か気が抜けたようにその場に座り込んだ。しばらく落ち着いていると、甲板で人だかりができた。「天皇島上陸」と言っていた人たちと口論になっているらしい。「済みません」と土下座しているようであったが、見る気にもなれず、船室で日本の話を聞いた。翌朝、日本海へ出た。

昭和二十三年五月六日、舞鶴港上陸。舞鶴の港は美しく、暖かかった。灰色のシベリアから青葉の日本へ帰国した。一步一步、自由をかみしめながら歩いた。涙がこみあげてきた。

引揚援護局でお重の差し入れを戴いた。父を看病してくれた看護婦さんとのことであった。復員の手続きも終了して、石生駅に降りた。父の姿のないことにす

ぐ気がついた。聞けば、父は昭和二十二年四月に故人となっていた。兄（勲四等 故松尾源三）もソ連に抑留中未帰還。留守を守ってくれた母と弟に囲まれて家族団らんを味わった。

#### シベリア墓参

平成七（一九九五）年度シベリア墓参団に参加し、五十年目にしてシベリア墓参を果たすことができた。

慰霊バス 夏のシベリア ほこりたて

五十年 思い語りぬ 夏の旅

蚊をはらい 墓碑ぼひを建てつつ 戦友とも祈る

#### 【執筆者の紹介】

全国強制抑留者協会より平成十二年度労苦調査依頼があったので、氷上町支部長芦田史朗氏に依頼した。

芦田史朗氏は、兵庫県戦争体験語りべ名簿に登録されている。地元の中学校の反戦集会等で活躍している。また、兵庫県が設立した「平和の礎」の境内の清掃を続けている。

十一年度には、全抑協兵庫県連合同慰霊祭を地

元、氷上町公民館大会議室で実施した。地元、氷上町支部長として協力を惜しまなかった。また、舞鶴引き揚げ公園へ見学旅を実施し、多数の会員が参加した。

（兵庫県 上月 光男）

### 第三部 抑留編

和歌山県 辻本 信二

はじめに

昭和十五（一九四〇）年三月、県立粉河中学校を卒業した私は、果てしなき希望を抱いて雄飛した第二の故里北満の地に、また軍隊生活と社会主義の国ソ連に抑留された十分の一世紀にわたる、身をもって体験した過ぎ来し方の回顧を、その順を追って思い出すままに雑然とこの小冊子、第一部 満蒙編、第二部 軍隊編、第三部 抑留編にまとめたものだが、文筆にはもちろん言葉の足りないところの方が多く、自信とてかけらもないが、ありのままを実録としてとにかく残し